

[月刊] キリスト教書評誌

# 本のひろば

## 出会い・本・人

つぎはぎもまた楽し 津村春英

## 特別座談会

大崎節郎 編

改革派教会信仰告白集

大崎節郎+佐藤司郎+田部郁彦+佐々木潤

## 本・批評と紹介

雨宮栄一 著

評伝井上良雄 渡辺正男

山下智子 編著

群馬のキリスト者たち 大平良治

山口勝政 著

閉塞感からの脱却 宇田 進

牧田吉和 著

ドルトレヒト信仰規準研究 水垣 渉

水垣 渉、袴田康裕 著

ウェストミンスター小教理問答講解

南 純

木原桂二 著

ルカの救済思想 大宮有博

佐々木勝彦 著

愛の類比 伊藤 悟

高柳俊一 編

近代カトリックの説教 石井祥裕

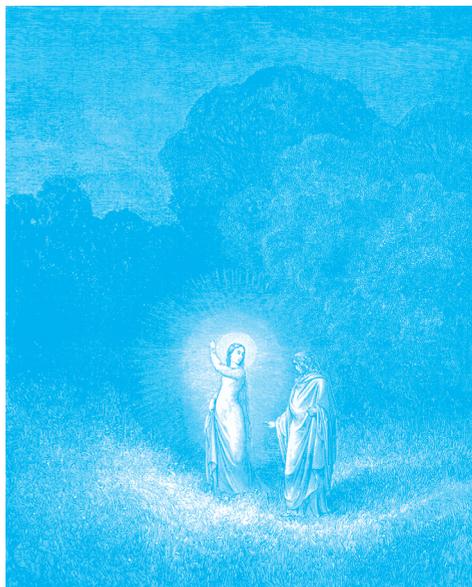
井ノ川 勝 著

信仰生活の手引き 教会 及川 信

近刊情報

書店案内

1 JANUARY  
2013





## 出会い・本・人

### つぎはぎもまた楽し——津村春英

私の神学の学びは後発であり、長期の海外留学の経験もなく、つぎはぎである。和歌山高専時代に、アメリカ人宣教師フランシス・B・ソリー、マリアンゴ夫妻と出会い、十九歳のクリスマスに御坊バプテスト教会で受洗した。学内の教職員祈禱会に誘われ、内村鑑三『一日一生』を輪読した。社会人になる前に、世にあるキリスト者としての心構えを教えられたと思う。これが第一の転機である。

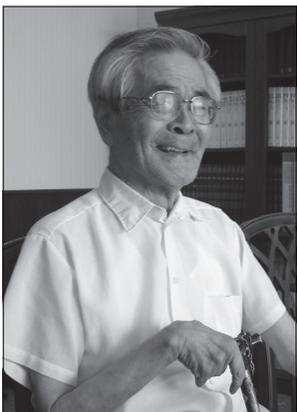
卒業して大阪の松下電器産業株に就職した。研究所や事業部の開発部門で十三年間勤務し、新製品開発に明け暮れた。仕事上、工学関連の専門書、論文、特許、定期刊行物、さらに経営に関する本などを読んだが、キリスト教関係の本にはとんと疎かった。猛烈社員時代ではあったが、毎週の礼拝は欠かさず、聖書研究祈禱会も努めて出席し、教会学校教師や聖歌隊で奉仕を続けた。

やがて、フィリピ書二章十二、十三節の、み言葉を与えられ、献身に備えることになり、上司の許可を得て、大阪基督教短期大学神学科Ⅱ部で三年間学んだ。授業が終わるや否や急いで会社に戻り、終電車に間に合う時間まで仕事をした。出張の際も、鞆にいつもギリシア語の文法書を入れていたのが懐かしく思い出される。やがて会社を辞め、同専攻科神学専攻に進む一九八四年には、子どもが四人になっていた。卒業後、幸いに学校と教会に職を与

えられ、これらの仕事を継続しながら続く二つの転機を経験した。第二の転機は、同志社大学大学院の橋本滋男教授との出会いであった。一九九一年に『ネストレIIアーラント・ギリシア語新約聖書第二十六版・序文』を師との共訳で出版していただいた。これを機に、本格的に神学の世界に入るようになった。引き続き、第二十七版も共訳させていただき、同大学院の博士前期課程、後期課程で学んだ。師のお仕事ぶりは、迅速でありつつ、きわめて正確で精度の高いものであった。惜しまれるのは、七十三歳で急逝されたことである。

第三の転機は、二〇〇二年当時、聖学院大学大学院におられた土戸清教授との出会いである。頻繁に上京することになるが、師により「ヨハネの世界」に招き入れられた。そして、その面談はいつしか快い至福の時になっていた。師の『ヨハネ福音書研究』を机上の、目に入るところに置いて、「ヨハネの手紙一」に関する博士論文を書いた。博士号を授与されたのは二〇〇五年、五十四歳の春であった。このように、私の神学の学びは、つぎはぎである。しかし、敢えて言わせてもらおう、つぎはぎもまた楽しいと。

(つむら・はるひで 大阪キリスト教短期大学教授、大阪日本橋キリスト教会牧師)



大崎節郎氏

派と比較し、いろんな角度から議論しなければならぬ。ルター派の告白は「信仰によって義とされる」ことが軸となっていて、ルター派の信仰告白はそれが中心です。それに比べると改革派は教会論への言及が圧倒的に多いですね。しかもたいへん細かいのです。かつて日本キリスト教会秋田教会の一〇〇周年のときに田部先生から「改革派教会の教会論」という題を与えられて、改革派教会の教会論だから、カルヴァンとか誰々のというのではなくて、特に改革派教会の信仰告白に表れた、教会論を整理してお話したわけですが、教会論もルター派と比べてみて、改革派の信仰告白は教会の問題に多くの部分を費やしています。改

革派教会のひとつの特徴ですね。西村さんがはじめに教会論の整理をしてみようと言われたのには十分な理由がありました。けれども私はそうしようとは言わなかった。それにもまた理由があって、改革派教会の教会論は改革派教会の信仰の一部である。教会論だけが存在しているわけではない。そのコンテクストを無視して教会論を扱うのは正しいとは思えない。教会論だけが孤立して存在しているのではない。教会論の背後には、神をだれだと思えているのか、人間はいたい何者か、そういったのがみな絡んでいるのだから、信仰告白全体をみたほうがいいと思う、と伝えました。したがって、訳すなら信仰告白そのものを訳した方がいいんじゃないかと、それで出版社に負担をかけることになりましたけれども（笑）。それが一九九四年のことでした。佐藤 約二十年前ですね。大崎 やりましょうとなってから約二十年です。秋田教会での講演の時に調べてみたのですが、信仰告白のなかで二〇から四〇

パーセントくらいが教会論に費やされています。いろんな理由がありますが、歴史的にみてもカルヴァンだけではありません。スイスの教会はドイツの改革に影響を受けて生まれた教会改革です。ドイツの教会改革はルター主義への改革が第一歩です。それで、スイスの教会はこれでは不徹底だといってカルヴァンへと移っていく。やがてカルヴァンの流れが勝利を収めて改革派教会が確立していきます。その後の改革が第二次宗教改革とよばれるものですが、結果的にこの部分は私がほとんど訳すことになりました。佐藤 そのような経緯があってわれわれの前に現れたわけですね。その構成などについては第一巻の緒論をご覧ください。いいわけですが、ともかく今こういう形で信仰告白集が生まれた。全巻が揃ったときの先生方のご感想はいかがだったでしょうか。田部 いちばん最初にどういうふうに編纂するかということをお伺いしたときにリストを見せていただきました。私たちが信仰告白文書といえますとだいたい決まってい

## 特別座談会

# 『改革派教会信仰告白集』

大崎節郎編 一麦出版社

大崎節郎 + 佐藤司郎 + 田部郁彦 + 佐々木潤



### 出版にいたる経緯

佐藤 はじめに、編集者である大崎先生から信仰告白集の出版にいたる経緯などをお聞きしたいと思います。全六巻がわれわれの目の前に現れて、たいへん驚いたのですが、この驚くべき企画を、どのようなお気持ちで、そしてどのような経緯で始められたのでしょうか。

大崎 最初からこういうものができると頭の中に思い描いていたわけではありません。いずれ教会が教会として成長していくためには自分たちの信仰の基礎が十分に反省されている、そういうことが必要だ、とは前から考えていました。私のところに最初に話があったのは、改革派教会の信仰告白の「教会」に関する部分を抜粋して出してはどうだろうか、ということでした。

改革派教会の信仰告白のひとつの大きな特徴は、狭い意味での教義の教会ではなく、信仰告白の教会ですから、ローマ・カトリック教会にはこういう信仰告白集はありません。そうすると、差し当たってはルター



佐藤司郎氏

るわけです。いろいろ、名前だけは知っているものはある程度あっても、実際によく知っているものとなると「ハイデルベルク教理問答」「ジュネーヴ教会教理問答」「第二スイス信仰告白」などになってしまいうわげです。その全リストを拝見しましてこれだけあるのかと、はつきり言って大変驚きました。そしてこの度完成して、今まで手にしたことのないものを日本語でこれだけ読める、と感動しました。この企画にかかわらせていただくまで、自分としては、信仰告白文書に、特別に深くかわつてきたことなどなかったわけです。ですからこの度これにかかわることによって、信仰告白の豊かさに改めて衝撃を受けました。改革

いるのです。

信仰告白とのかかわり

佐藤 信仰告白というものを、われわれは有名なものだけを取り上げたり勉強したりしてきたわけですが、神学生の時から今日まで、とくに教会の説教と牧会の実践において、どういうふうに取り扱ってこられたでしょうか。

田部 まず神学生の頃から言いますと、昔日本キリスト教会神学校で学んでいた折りに信条学がありました、そこで渡辺信夫先生から、「ハイデルベルク教理問答」と「ジュネーヴ教会教理問答」と、「ウェストミンスター小教理問答」の三つの対観表をつくるという課題が与えられました。一所懸命、この三つを見比べて書きました。三冊写すというだけでも大変です。これが後に役に立つんです。時間をかけてやったこの対観表は今でも手元に置いてあります。牧師になってから教理教育と言いますか、洗礼に至るまでの準備のときに「ハイデルベルク教理問答」をよく使います。しかし、

派教会の多様性にはじめて気づかされた、というのが正直なところですよ。時代と場所によって教会はいろいろな信仰告白文書を生み出してきました。それはやはり改革派教会の豊かさ、改革派教会であるからこそこういう信仰の告白を生み出してこれらだと改めて認識させられました。

佐々木 私はリストを知らなかったんです。なにが収録されるのかを。大崎先生が、原稿が出ないんだよ、とおっしゃっておられて、たいへんご苦労なさっていることを聞いていましたが、全貌は知らなかったんです。「本のひろば」の綴じ込みで広告が出たときに、初めて一覧を見て、その分量の多さに驚きました。

佐藤 収録された信仰告白を見て、先生方が、聞いたことしかないものも、聞いたことのないものもあつたとおっしゃっていましたが、本邦初訳というものはどれくらいでしょうか。

大崎 全体の約七割です。

佐藤 緒論で先生が書いておられるように、「歴史的学問的な吟味によって」選択

ある教理簡条が「ハイデルベルク教理問答」だけでなく、「ジュネーヴ教会教理問答」で、そして「ウェストミンスター小教理問答」においてどう言っているか。この三冊だけでも表現のしかたや強調点が違います。そのように三つを比べながら、「ハイデルベルク教理問答」を使って、もう少し幅広く深く、特に改革派教会はこういうふうな理解をしているんですよ、という具合にやってきましたわけです。この度たくさんのものを日本語で読めるようになりました。

今、私は、少しばかり聖書論に興味をもっています。そのようなこともあつて聖書と信仰告白文書とはどういった関係にあるのかということに関心があります。聖書にかわつて信仰告白文書が独り歩きする、なんてことはありえないわけですから。ノルマ・ノルマータ（規範する規範）と、ノルマ・ノルマンズ（規範される規範）とかの問題です。洗礼準備のときに、聖書は私たちにとつて信仰と生活の規範だと説明します。それと同時に信仰告白文書は、聖書の言っていることと別のことを言っているの

されたのは、あまり恣意的、意図的ではなく、全体像を提示したいと願われたわけですね。

大崎 結果からみれば、今まで訳されたものは、やはり大事なものが訳されています。これは当然です。しかし同時に、改革派教会の信仰告白と違って今まで訳されていたものだけしか思い出さないううのでは、全体をつかむことになりませんね。

佐藤 先ほど先生方が多様性と言われていましたが、それが示されたと思います。

大崎 ルター派の告白と改革派のそれでは大きな違いがあります。かつてバルトがゲッティンゲンの時代に両者を比較しました。バルトは、改革派の信仰告白は「凍りついた河ではなく、流れている河」であり、「生きているから変化するのだ」と言います。これが改革派の教会なのです。まだ流れていて生きているから、最後の言葉を語ることはできない。それは、われわれの力がたりないからでもあります。それ以上に、聖霊の新しいはたらきが教会に新しい言葉を与える、ということに希望をおいて

ではないということも説明することになります。信仰告白文書をとおして、それぞれの時代と場所において、教会が聖書をどう読んできたのかということが明らかになって、そこで聖書と信仰告白文書とのかかわりがはつきりしてくるようになります。佐藤 教派によつては一つ、あるいは二つの信仰告白しか信徒が知らないとなると、信仰がごく不自由になってしまいます。広がりが出てくることによってむしろ逆に聖書に帰れるのではないかと。

田部 多くの信仰告白文書をとおして、むしろ自由に聖書に聴いていける。

佐藤 その時代の表現、この時代、我々の時代の表現、とか。

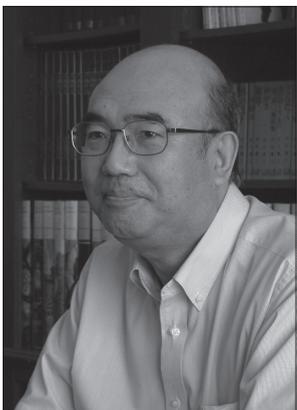
田部 そうすると、今、どうなのか、とね。そのあたりが私自身のひとつの関心事でもあります。

佐藤 佐々木先生どうですか。

佐々木 自分の原体験は、日本基督教団信仰告白ですね。自分の高校生まで育った教会では、毎週日曜日に礼拝の中でみんなで唱えていましたから、自分も暗唱しました。

あれが信仰告白を唱える原体験だった。唱えるのは、短い文章だったからできたんですけど。「エゲル谷市民の信仰告白」(一五六二年)のような膨大なものでは有り得ずね(笑)。

反復する言葉は、やはり自然と物事を考えるときに筋道を助けてくれます。自分のバックボーンになり、血液になって、自分を育ててきました。もうひとつは、高校生のときに求道会で牧師に手ほどきしてもらって、他の高校生たちと一緒に読んだ「ハイデルベルク」です。絶対自分では牧師に質問しようとは思わないことが、設問で出てきて、答える。それで信仰の筋道を辿っていく。一問一答式というかたちからすれば、私たちの時代には合わない形態だったかもしれないけれども、あれがカテキズムとの出会いです。それを自分も牧師になってから、求道者を相手に反復しています。なにより、自分のためになります(笑)。反復することに宿る力がありますね。聖書を読むときの助けが、そこにはあります。佐藤 先生がおっしゃったように、たとえ



田部郁彦氏

バルター派教会なら「小教理問答書」ですか、それを、先生が教団信仰告白を勉強したようなかたちでくり返すことによって、ある信仰の筋道が、信仰の敬虔、その質がある意味決まっていくわけです。たとえ全六巻の大部なものが出てきてもそのことの重要性は変わらないわけです。

佐々木 そうですね。ただ重要性は変わらないけれども、相対化される。全体の風景のなかに、先程言われた「河」のなかに、自分もまたいる、という位置づけ方が起ります。全体は動いている。定点をわれわれ自身の中にもつことが教会の確かさではありません。外に定点があって、それと霊的に接続されることで、教会が建てられて

いる。これらの信仰告白を読むと、そういうことがわかってきます。

翻訳者として取り組んで

大崎 信仰告白を考えるときには常識ですが、改革派教会の歴史をみると、特にヨーロッパ大陸を越えたところに伝わるまでは、いちばん軸になった信仰告白は「第二スイス信仰告白」です。多くの人は自分の教会を第二スイス信仰告白の教会、と呼んでいたのです。「ハイデルベルク教理問答」がもっと簡潔でわかりやすかったのでそちらに移っていきました。こうして改革派教会をハイデルベルク教理問答の教会と言うようになりましたが、大陸の改革派教会が自分たちを第二スイス信仰告白の教会と呼んでいたように、やはり軸になる信仰告白というのはあるのです。

翻訳に関してですが、日本語は表意文字を使うので、聖書朗読のときなど会衆は聖書を開いて見ますね。表音文字だとそれは必要ないんです。表意文字だからどういう文字を使っているか見ないと理解ができません。

い。rとーとか日本語は音が違うから区別できない。区別できなければどういう字を使うかわからないんです。音読することとは大きなことです。

信仰告白だけではなく、時代の変化で言葉は変わります。あのころの原典を見ていくと綴りが違うんです。文章を発音して読んでみて初めてわかります。普通の辞書では出てこないものもあります。綴りが現在のものと違うものですから、どうしても見つかからないものもありました。ところが発音して考えた結果、これなら意味が通じる、というものがいくつもありました。

田部 私は「ハイデルベルク教理問答」「合同キリスト教会信仰の声明(アメリカ)」を担当いたしました。「ハイデルベルク教理問答」は、たくさんさんの翻訳があるわけですが、とにかくたくさんさんのすでに出ている翻訳を読みました。実際、こんなおそろしい翻訳ないな、と(笑)。足がすくむような思いで翻訳に取りかかりました。佐藤 最も伝統のある信仰告白文書の翻訳ですからね。

田部 翻訳する力が十分にあるわけでもない自分が翻訳する意味ってなんだろう、と。自問自答しながら、奇をてらったようなこともやりたくないと思いました。私自身、

これまで信仰の筋道を学んだり、考えたりするときに、竹森先生や登家先生の訳をずいぶん読み込んできているわけです。頭のなかには、竹森先生や登家先生の訳文が残っているのです。それだけに、そこから離れてそれらの訳にとらわれずに自由に訳してみたいと思いました。決して今までのものを凌ぐ何かなんていうことはひとつも考えていませんし、たくさんあるなかで、もうひとつそこに加えてもらおう、少しでも何かのたしにでもしていただければと思ひ、参加させていただきました。もう一つ心がけたのは、声を出して読むときに日本語としてすんなり読めるものをめざそうということです。うまくいっているかどうかは別として。

佐藤 先人の訳業をふまえつつ、テキストと真摯に格闘するということが、読者の立場でそれが読まれたときの日本語の表現の

問題ですね。説教に用いますからね。

田部 自分が牧師として現場に立っているときに、自分で使えないものをつくってもどうしようもないですから。それから翻訳に際して大崎先生から「ハイデルベルク教理問答」の第三版の復刻版をお借りしました。実際の翻訳のテキストの底本としては、ニーゼルのテキストを使用しました。先程も話がありましたが、今の綴りと違う場合があつて、オットー・ヴェーバーの現代語のものを参照して助けられました。

佐藤 佐々木先生は、翻訳者としてかかわっていかがでしたか。

佐々木 すごくいいものを預けていただきました。「南インド合同教会合同の基礎」「南アフリカ・オランダ改革派伝道教会信仰告白(ベルハー信仰告白)」「アメリカ合衆国長老教会信仰についての短い声明」「スコットランド教会キリスト教信仰の声明」の四つです。

先行するものがない、海のものとも山のものともわからない、調べようもないなかでやりました。合っているか間違っている

のかもわからないまま、とにかく読みました。どれも第Ⅵ巻の二十世紀のもので、いわゆる正統的な教理の要約とか、その表現を言い直すのはまた少し違う。それぞれのコンテキストのなかで、言葉にしなればならないことに向かっていく切迫感もあれば、自由さもあり、それがその教会でないと書えない言葉になっている。それを読むことの興奮がありましたね。

大崎　そこまで掘んだということは、改革派教会の真髓を掴んだということですね。

佐々木　ありがとうございます。でも、後の人が資料として手にするものを残す責任も感じました。文体にはひどく悩みました。佐藤　私はラテン語の短いものですが「ローザンヌ提題」、カルヴァンの有名な「フランス信仰告白」など、全部で六つほど訳しました。いちばん印象深かったのは「ピエモンテ・ヴァルド派の簡潔な信仰告白」です。アナテマ条項が入っているんです。まだものすごい戦いのなかにあったんだなあと、とても印象深かったですね。解題を書くために関連のものを読みました。たと

えば、大迫害に際してクロムウェルがイギリスの教会に呼び掛けて、ピエモンテの教会に多額の献金を送ってきたり。そういうことが心に残っています。初めての訳が三つで自信はありませんが、とてもいい経験させていただいたと思います。

大崎　信仰告白というのは机の前で考えてつくったものではありません。文章を推敲したりはしているけれども、実際の戦いのなかで、出来事として起こったものです。みんな新しい信仰告白をつくらうといつて、準備が大切だとか、そういうものでもできるものではなくて、ほんとうに出来事として起こるのです。それではなにも準備しないでもいいかという、そうではない。ペトロの手紙一、三章一五節「あなたがたのうちに与えられている希望について説明を求めるところがあつたら、いつでも丁寧に説明してあげなさい」と、そういうことです。いつでもその用意をして、しかし折りに叶わない言葉を語らない。やむをえない言葉としてここから。そのときは自分の命をとられるかもしれない。そういう出来事に

おいてです。いつでも言えるようにしていただき、ということですね。

読者のひとりとして

佐藤　読者としての感想はいかがでしょうか。

田部　これまで聞いたこともない信仰告白など、あまりに知らなかったものが多すぎて驚きました。

大崎　われわれが今までに知っていたものは氷山の一角にすぎない。皆が知っているものしか、訳されてこなかったんですから。田部　たとえば、それがどういふ信仰告白文書なのか調べようと思って『キリスト教大辞典』なんか見ても出てきませんし、RGG、TREなど大部な事典類にも出ていないものもずいぶんありました。

大崎　こういうものから体系的に知識をひろげていくことが大切です。

佐々木　信仰告白集の文書と文書のあいだには、まだまだ無数にあるということを感じはしつつも、目にふれる機会すらなく、目にふれても読めないものが多い。永井修

先生の『改革教会信仰告白要覧』ではのかなか香りをかぐしかなかった。

大崎　英訳されている信仰告白よりも、新しくドイツで刊行されつつあるものよりも、どれよりも、今回の信仰告白集は多いんです。それらにないものまで載っている。今まで出たものなかでは一番多数です。

佐藤　それが日本で出来たというのは驚きです。ドイツ教会闘争関連のものは、三つ入りました。よい選択だったと思います。

近藤勝彦先生が「推薦の言葉」で書いておられたように、読めといつてもないという状況でしたが、この度、それらすべてを読むことができるようになりました。すばらしい企画だったと思います。



佐々木潤氏

どう活用するか

田部　日本キリスト教会は「日本キリスト教会信仰の告白」というものを持っていて、数年前それを口語化しました。口語にする作業自体が大変な作業でした。

そして、今、やはり今の時代状況のなかで新しい信仰告白をつくりあげることができたら、などと私などは思っているわけですが、それはたいへんな力量を必要とされると思います。ですから、もしそういう作業をするようになった場合、やはりこういう信仰告白を集めたものが目の前にあるということはいろんな意味で影響してくると思います。この信仰告白集を無視しては新しいものをつくることはできないのではなにかと思います。それこそ今の信仰告白は簡単信条ですよ。『使徒信条』に前文がついているものです。一八九〇年の旧日本基督教会のものもそうです。今度新しいものをつくるとしたらそれでいいのかわるか。もう一つは日本キリスト教会では「教理問答」の草案ができていましたが、以前、

大会でそれを正式に採用することを決められませんでした。やはりそういう教理問答を作成していくということもいま迫られているのかもしれない。そういうときに、もこういふ数多くの信仰告白文書と対話しながら今の時代のなかで、こういうものをつくらうのか、また教会が信仰告白文書をつくりあげることが教会形成にどのように資することができるのか、考えなければと思っています。

佐藤　日本基督教団の場合は、信仰告白をめぐるさまざまな問題がありました。石原謙が著書のなかで、第二信仰告白の形成への期待を述べているところがあります。われわれは今、この信仰告白集がありますから、知らないでやるわけにいきません。丁寧に勉強しながら合意を形成していく、告白していく、教会形成の武器といえますか、力になりますね。

田部　教会の合意のなかで信仰告白文書や教理問答などはつくりあげていくのですが、その際に、このたびの信仰告白集は日本語ですからみなさんが手にすることがで

きるわけです。専門家の一部の人たちだけではなく、数多くの教会に連なる人たちがこういうものを目にしながらひとつの信仰告白的な合意を形成していく。そのためにはものすごく意味があると思います。

大崎 信仰告白は、出来事として、聖霊が起こしてくださるんだと思います。人間がつくろうと思うのではない。

田部 確かに時代の要請のなかで必要性があつて、やむをえず生み出される。必然性がないのにつくらなきゃいけないというしかたでつくるものではないと思います。

大崎 バルトが対談しているなかのひとつに、「バルメン神学宣言」はすごいですね、どういうふうにしたらあのような宣言ができるのでしょうか」と言われているものがあります。「今はそういう時ではない。今に必要な時があるんだ。それは与えられるもので、『バルメン神学宣言』を、バルメン・ロマンティックみたいなことをしてはいけない。いま必要なのはそういうことではない。雀を撃つのに大砲はいらない。今、雀を撃つことが大事なのであって、大砲を

撃つ必要はない。大砲を撃たなければならぬ時は命がけてやらなければならぬ。雀を撃つのは鉄砲でいい。完成した『文書』だけを見て、バルメン・ロマンティックみたいにしてはいけない。今はその時ではない」ということを言うわけです。

田部 信仰告白的な事態をどう見るかということはあると思いますね。

大崎 与えられるのです。なにも言わないというしかたで告白することもありうる。

佐藤 ポンヘッファーが、戒めの具体性ということを言つて、戒めを具体的に語るには、現実認識が必要だ。しかし現実認識があまりにも多様で、結局戒めを具体的に語れなくなってしまうおそれが生じる。われわれの現実認識はごく一部でしかなく全部を知るなんて不可能なのに、戒めを具体的に語らなければいけなくなると、間違の可能性もある。しかしそこに賭けていくんだ、と言っています。具体的に語るんだ、告白もそういうものだと思います。

大崎 「ウビ・エト・クワンド・ヴィズム・エスト・デオ」。宗教改革期の告白のこと

ばです。神がよしとしたもう「時」と「所」で起る。聖霊の業だから。だからといって自分たちが何もしなくていいわけはない。いつでも必要とされる時には告白する用意をしなければならぬ。こういうところも改革派的だと思います。

この信仰告白集で、信仰問答ということばを意図的に避けました。どうしてかわかりますか。信仰問答と教理問答は、伝統的にはなんとよばれていますか。

佐藤 田部 佐々木 「カテキズム」

大崎 カテキズムというのはカテケイン。すなわち「響く」「教える」という意味で内容とは関係ないものです。なぜ本来的には教理問答なのに信仰問答と言ったか。信仰をどう考えるかなんですが、ある人たちは信仰に問答なんかないというんです。信仰は問答によつてうまれるのではない。ではなぜ信仰問答と言ったのか。今までみな信仰問答と言っていたが信仰を問答していたわけではない。教理を問答していたのです。それには言葉の歴史がある。ラテン語で信仰はフィーデスと言いますが、フィー

デスという概念には主観的側面と客観的側面があります。フィーデス・クワーとフィーデス・クエー、ここでの信仰はそこからきているので、どちらの信仰を採っているかです。歴史からみれば信仰問答も悪くはないです。でも近代以降の人は信仰というクワーを考えます。主観的、私が信じるということ。しかし、同時に信仰の対象を問題にしなければなりません。ですから、信仰問答でいけなくはないのですが、そういった歴史を前提にする必要がある。それゆえ信仰問答でもいいのですが避けたという訳です。

佐藤 では、佐々木先生はこれらをどのように活用しようとお考えでしょうか。

佐々木 神学生や若い牧師たちに手にとつて親しんでほしい。おすすめます。いわゆる信条主義かそうでないかは関係なく、教会が「われわれ」という一人称複数で語れるのは大切なことです。「われわれ」のなかに、説教者も第一の発声者として立てられている。それを、これらの言葉のなかで経験してほしいです。なんの信仰告白と

一致しているからいま自分は正しい言葉を語っているという理解ではなく、大きな流れのなかで、いまの私たちの教会も聖書から聴き、それに対して応える。そういう意味で、いま立っている教会に託される宣教の言葉として、説教が音声化される、ということを意識することになると思います。

「バルメン神学宣言」に「ハイデルベルク」の言葉遣いが出てきます。十六世紀の言葉が、こちらでは二十世紀の戦いのなかで語るべき言葉として、しかも引用としてではなく、記憶を呼び覚ましながらも、新しい響きで語られている。新しい告白というの、目新しいことを言うということじゃない。特殊なコンテキストで言い表しているのに、他の告白と共鳴して、それで自分たちの言葉が力を得る、歴史を貫くひとつの声になって唱和することになっていくということが起こるんです。

佐藤 大きな流れのなかでわれわれが告白していく、ということですね。バルトは晩年、「自分をはじめからエキュメニカルな神学を教えてきた」と言っています。その

場合のエキュメニカルというのは、いわゆるエキュメニズムの運動というのではなくて、おそらく大崎先生の言つておられる「大きな河」ではないでしょうか。ひとつの教派に与したというのではない。

大崎 バルトは、決して教派主義者ではなかった。

佐藤 エキュメニカルな教会に仕える、ということですね。

佐々木 わが教派を語るというよりも、普遍的教会に接続する言葉を求める、というところが、改革派の自己理解として大切なことだと思います。

田部 普遍的な教会に接続する言葉として大切だと思います。

(おおきき・せろろ) 東北学院大学名誉教授 元高綱学院院長

(さとう・しろう) 東北学院大学教授

(たべ・ふみひこ) 日本キリスト教会西部教会牧師

(ささき・じゅん) 日本キリスト教団武蔵野教会牧師

\*お知らせ

別巻(全巻索引・論文、非売品)は、

二〇一三年一月出来予定です。

有効期間は二〇一三年三月末日迄です。

バルトに出会い、「世のための教会」を模索した生涯  
雨宮栄一 著

評伝 井上良雄  
キリストの証人



渡辺正男

敬愛する井上良雄先生がなくなつて、まもなく一〇年になる（二〇〇三年六月一〇日逝去）。この度、喜ばしいことに、『評伝井上良雄——キリストの証人』が出版された。

文芸評論家としての若き日のこと、評論家としての筆を折り、「無為な、荒廃した日々」から教会とバルトに出会うまでの井上先生の前半生について、多くを教えられる。

「キリストの証人」として一筋に生き抜いた後半生は、清冽な歩みとして、生き生きと語られている。バルトの『教会教義学』の第IV巻「和解論」の翻訳（全三三分冊）、ブルームハルト父子の研究、キリスト者平和運動のこと、教団の社会活動基本方針への関わり、「世のための教会」の教会論などがいねいに論じられていて、「戦後教会史と共に」あつた井上先生の歩みが、温かい文章で描かれている。

葬儀の折に、井上夫人が挨拶して、「故人は、自分の生きざまから分離された客観的な事柄には、関心がもてない人でした。それ故、個人の行動はいつも、主への信仰告白としてなされていると、私は感じていました」と話されたという。浅野順一牧

師は先生を「誠実が袴を付けて座っている人」と評したというが、先生は、信仰は信仰、生活は生活という二元論に抗し続けた希有な人であつた。

井上先生は、「カール・バルトの導きによって私に示された福音の世界は、実存的なものも社会的なものも包みこむような広大な世界であつた」（四五六頁）と述べている。多くの場合、信仰が実存的・内面的なものに留まるきらいがあるが、内面的なものも社会的なものも一体として受け止めている先生の福音理解と、主イエスに単純に服従する生き方が、多くのキリスト者に勇気を与えてきたのではないかと思う。

井上先生の福音理解は、その教会論によく示されている。著者は、「井上がキリスト者としての生涯にわたつて追求してきた課題は、自分自身を、換言すれば自己の教会をして『世のための教会』たらしめるという一事であつた」（四五八頁）と記している。日本の教会は、世の問題から隔離された逃避的救済をこととする「宗教化」と、世に同化して、世の事は世の知恵でという「世俗化」と、この二つの誘惑に屈してきた。井上先

生の歩みは、この宿弊二元論的思考に抗して、自分自身と己が教会を「世のための教会」として形成する戦いであつた、と言うのである。著者は、その志が受け継がれなければならない、と熱く語っている。

「こんな教会を目指すのか」は、私たちにとつて避けて通れない課題である。教会派、社会派と対立的に呼ばれるなかで、私もどういふ教会を目指すのか、を考えざるを得なかつた。そして何よりも、バルトの「世のための教会」に教えられ、そのことよつて、私は牧師としての歩みを許されてきたと思つている。そのバルトの教会論について、井上先生の数々の文章から、特に『地上を旅する神の民——バルト「和解論」の教会論』から多くを教えられてきた。この度、『評伝井上良雄——キリストの証人』を読み、その感謝の思いを深くし、新たにしたい。小さな町の小規模な教会に仕えた者として、教会がその地に存続し続けることの難しさを、私も少しく経験してきている。

しかし、生きることには精いっぱい一人一人をよく受容する教会でありたいと思う。そして、世を代表して礼拝をささげ、主の和解の福音を伝道し、地域社会のために祈る「世のための教会」を形成していきたい、と願わずにおれない。このことは、今日多くの牧師・信徒の心にある願ひなのではないだろうか。本書は、その志を鼓舞し、勇気を与えてくれるに違いない。

最後に、著者に感謝したい。雨宮栄一先生は八五歳になられるが、この一〇年執筆に没頭してこられた。『主を覚え、死を忘れるな——カール・バルトの死の理解』（二〇〇二年）から始まつて、賀川豊彦三部作、植村正久三部作、『評伝高倉徳太郎上・下』、そしてこの度の『評伝井上良雄』である。一〇冊を数える。病を抱えながら、主と教会に仕える思いでの、いのちの全てを用ひての著作である。敬愛の念を禁じえない。

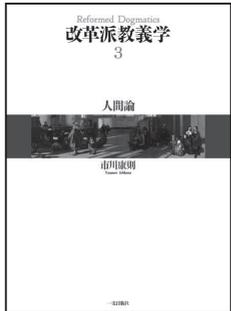
（わたなべ・まさお 日本基督教団隠退教師）  
（四六判・四八〇頁・定価三九九〇円（税込）・新教出版社）



人間論

〈改革派教義学〉第3巻

市川康則  
Yasunori Ichikawa



「三位一体の創造者なる神のかたちである人間」——ここに、人間についてのすべてが凝縮して教えられている。

改革派教義学  
全7巻  
〈内容案内進呈〉

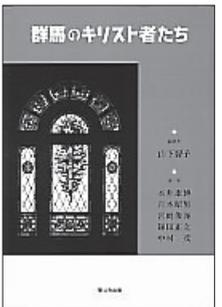
A5判・上製・函入  
定価 4,200 [本体4,000+税] 円  
ISBN978-4-86325-048-2



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
http://www.ichibaku.co.jp  
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

日本有数のキリスト教界の伝道史  
山下智子編著

## 群馬のキリスト者たち



## 大平良治

本書の編著者である山下智子准教授は、そのまえがきで、群馬の誇る「かるた文化」の中でも、群馬県民に最も愛され、子どもの頃から親しまれている「上毛かるた」に登場する二人のキリスト者について書いている。

二人のキリスト者とは新島襄と内村鑑三である。いずれも群馬県が生んだ偉大なキリスト者である。

本書は、この二人に加え、その影響を直接、間接に受けて活躍した群馬のキリスト者たち（湯浅治郎、柏木義円、深澤利重、不破唯次郎、周再賜、山村暮鳥、コンウォール・リー）を取り上げ、分かり易く平易に書かれている。

また、「上毛かるた」の制作にかかわった須田清基牧師についても触れている。私は、須田牧師が敗戦直後、自転車の後ろに紙芝居をのせ、小学校に来て伝道する姿を覚えている。

山下さんは最近、須田牧師について研究を深め、再発掘され、新島学園短期大学の紀要に発表し、県民から大きな反響を呼んでいる。また、山下さんは、本誌二〇一二年九月号にも紹介された『こひつじたちのあいうえお』の著者でもあり、本書では

湯浅治郎と柏木義円を担当されたが、地域にまなざしを向けた地道で熱心な研究姿勢と態度は高く評価されている。

群馬県は明治時代の前半期、教会数においても、信徒数においても、全国の中でも五指のうちに数えられるほど有数のキリスト教県であった。

その背景として、一説では群馬県は、徳川幕藩体制を支えた米本位制の中にあつて、全国でもめずらしい畑作が主流の地域であったために、水田と違って農村共同体の拘束力が弱かったことにある。さらに開国による横浜開港により、群馬の特産品であった生糸（絹）が輸出の大宗をしめることになり、蚕糸業、製糸業が発展し、西欧の近代的精神であるプロテスタントキリスト教に触れ、啓発されたためということも言われている。

群馬県史は、群馬県近代史におけるキリスト教の特質について次のように説明している。

（通史編9・近代現代3）教育・文化

①その地域の産業を担う指導の名望家とも目される生産的階層にまず受容されたこと。

②キリスト教信仰に基づいた自由、自治、自助の思想を骨とする新しいタイプの人間像を輩出させたこと。

③女性の権利、家庭浄化、廃娯運動、働く女性の教育などキリスト教の人間観に基づく女性の人格尊重とその実践を行ったことなど。

しかし、群馬のキリスト教が全国有数の位置を占めたことも、その特質にしても、最も重要な背景（要因）としては、新島襄の宣教によるプロテスタントキリスト教を受容し、内村鑑三の影響を受け、群馬の地域において、厳しい環境の中で活躍した本書に取り上げられているキリスト者たちの熱い献身的な働きの結果であったということは確実に認められている。

本書の著者（執筆者）も、新島襄を担当された本井先生、内村鑑三を書かれた月本先生、コンウォール・リーを執筆された中村先生は、ともに全国レベルで活躍されているが、いずれも群馬と縁の深い、特別の関係を持っている先生方である。

# 解釈学的神学の現在

松木真一 著

A5判 定価2940円（税込）

「人間が壊れる」今日の時代の中で、聖書のテキストを正しく理解し新たに解釈するという解釈学的課題のもと、本書は解釈学的神学に関する諸論文を通して、新しい展望と将来を切り拓く道を探求した絶好の書。

共愛学園の発展に尽くした人々を担当された宮崎先生は、群馬県を中心として、地方（地域）をフィールドとして研究され、すでに多くの労作を発表され、県民から高い評価を得ている先生である。山村暮鳥を執筆された鎌田先生は、共愛学園前橋国際大学のチャプレンとして活躍されている先生である。

今、私たちは、かつて経験したことのない大きく激しい変化の中にいる。特に人口減少・超高齢社会の本格的到来と経済の長期低迷の影響を受け、地方は衰退している。

今こそ、本書により群馬のキリスト者から学び、平和で自立した真に豊かな地域社会を築き上げていくことが強く求められている。新しい時代を切り開き、それを担い支える新しい人材を育てるために最も相応しい教材として広く活用されることを願っている。

（おひら・りょうじ）学校法人新島学園理事長  
（B5判・二〇頁・定価一八九〇円（税込）・聖公会出版）

子平先生 松木真一 編著

## キエルケゴールと

## キリスト教神学の展望

（人間が壊れる）時代の中で 5460円（税込）

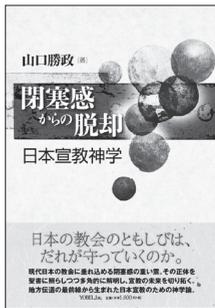
## 現代科学と倫理

科学技術と人間の関係のために 2520円（税込）

〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL0798-53-7002 FAX0798-53-9592  
http://www.kwansei.ac.jp/press/

現代の宣教課題に関する注目すべきガイドブック！  
山口勝政著

## 閉塞感からの脱却 日本宣教神学



宇田 進

評者は、本書の表題に登場する「閉塞感」という三文字を見ても、半ば反動的に、かつてアメリカの『タイムズ』誌上（一九八九年五月二十二号）で目にした一つの暗い記事を想起させられた。それによると、アメリカの主流派を構成する次の教会は軒並み教勢の急激な落ち込み、直面しつつあるということである！ 合同キリスト20%、長老25%、聖公会28%、合同メソジスト18%、デサイブル43%減というきびしい状況が報告されていた。

実は、本書も、他国ではなく、まさにこの日本の教会の上につれこめていく類似した暗雲を率直に直視しようとしている。と同時に、皆が願うそれからの脱出・脱却、そして、一歩前進のための着眼点と今後の掘り下げの道筋とを提示している。それは、よく神学教育の現場で目にする単に机上の論議だけに基づく呼びかけではない。それは、実に三十三年におよぶ地方（このたびの「大震災」の隣接地域）での伝道・牧会と、地道な「宣教神学」の掘り下げ（研修所も運営）の中から生まれたものである。

著者はまず大局的に、共同主体的に使命を担うというよりも、ヨンを提示している。第二部では、基盤また原点とも言うべき宣教の聖書神学が提示されている。著者はその原型としてパウロの「アレオパゴス説教」（使徒十七章）を解説する（第六十六章）。この点で、第三部の第十一章「宣教の神学」を合わせて見ると有益である。七章では、宣教の「原動力」とも言うべき聖霊論が、そして八章では「規範」とも言うべき聖書論が提示されている。現代の「多元化」の状況の中で、「宗教における信憑性の危機」（バーガー）とか「規範喪失」（デュルケム）という指摘の音が聞かれる中、著者は特に「聖書の無誤性へのコミットメント」の重要性を訴えている（八章）。この基盤が失われる時に、宗教の主観化とともに、教会と宣教の衰退、人間主義化、世俗化、そして倫理の崩壊などを招くと指摘している。

最終の第三部では、現代宣教の領域とそこで取り組まれている重要な具体的課題とを九章から最終の十五章において論じている。

池田勇人 著 \*ヨベル新書12

## あかし文章道への招待

＊好評発売中！

文章力を極める！

刀を振り回すのがお侍というのではなく、……国の中の自分たちの使命をしっかりと持った上で、剣術の修行をし、生き方の道を極めて行くのが武士道……だとすれば、同様に上手な物書きになるのが目的ではなく、もろ刃の剣である言葉を使う私自身の修練、成長というものがあつてこそ、文章道というものが成立し、言葉を探求することは、即自分の内面を磨くことにつながる……これが私の考える「あかし文章道」(本書より)

◎新書判・三五六頁・一〇五〇円(税込)

\*絶賛発売中 ヨベル新書 007\*

山下万里 著

## 死と生

### 教会生活と礼拝

頼み合い山路は、確かに越えられ 宮村武夫

御言葉は、自分が置かれている状況の中に響いてきます。それを一人ひとりが聴きます。御言葉は私たちに、慰めを与え、喜びを満たし、あるいは励まし、教え、戒めます。

与えられたところを分かち合う時、私たちは今度は、他の兄弟姉妹の言葉に耳を傾けることとなり、兄弟姉妹の悩み、願い、慰め、喜びの示しを受け取ります。

\*新書判・272頁・1,470円(税込)

株式会社ヨベル YOBEL INC.  
info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
\*自費出版の専門出版社\*

自由な主観的選択を特色とする米国発信の「グローバル新自由主義」の空気が、今の地方教会の「閉塞状況」を包んでいないだろうか、という問い掛けをもってペンを進める。具体的には、地方における教会の閉鎖の現実と無牧化の状況、礼拝出席者の減少、献金の減少、世界宣教における宣教師派遣力の衰退の現実、そして信徒の霊的資質の劣化と根柢に見取れる信仰規準の不透明状況、特に聖書観の後退と劣化のきびしい現実を、発起点として指摘する。考えてみると、こうした現実には、「エキユメニカ派」、「福音派」（近年マスコミでは「原理主義」と表記されることが多い）を問わず、今、日本の教会全体が直面しつつある共通の問題・課題であると言えるのではないだろうか。

全体は三部・十五章で組み立てられている。第一部では、まず、前述した足元の地方教会の危機的状況の分析、日本教会のミッションへの依存の状況と結果として生まれた階級的構造、それを克服するための聖書のコイノニア（聖徒の交わり）論、そして日本人の共通問題としての「祖先崇拜」に関する「コンテクスチュアル」（よく「文化脈化」と表現される）な取り組みを提唱しながら日本における宣教論のいわばオリエンテーシ

（うだ・すすむ）東京基督教大学名誉教授  
（A5判・二四八頁・定価一八九〇円（税込）・ヨベル）

福音の慰めとしてのドルトレヒト信仰規準  
牧田吉和著

## ドルトレヒト信仰規準研究 歴史的背景と信仰規準とその神学的意味



水垣 渉

ドルトレヒト全国総会議は一六一八年から一九九年にかけてオランダのドルトレヒトで開催されたオランダ改革派教会の総会議である。アルミニウスに端を発した予定論を中心にした論争をめぐって開かれたこの会議にはイギリス、ドイツ、スイスからも神学者が参加したので、改革派教会の歴史においてはエキユメニカルに近い性格を持った唯一の教会会議といわれる。そこで決定された信仰規準の内容は、チューリップ (TULIP) というスローガンで記憶され、その後の改革派諸教会とその神学に大きな影響を与えたことでよく知られている。しかしこと予定論に関する信仰規準であったから、今日に至るまで誤解は絶えない。その多くは、この会議の歴史的背景と意図、また信仰規準そのものについての無知と、受け売りの二次的知識と由来するであろう。本書は、この会議の正確な歴史的説明と信仰規準の翻訳と信仰規準の意図的確な神学的解釈を行った本邦最初の研究である。本書によって、少なくとも故なき誤解の余地はなくなるはずである。この意味でも本書の刊行の意義は大きい。

著者は、神戸改革派神学校で長年組織神学を教え、現在は高知県で牧会に携わっている、改革派教義学の専門家である。いうまでもなく、ドルトレヒト総会議については、その根本史料、信仰規準の校訂テキスト、研究文献も本場オランダで最も多く出版されてきたから、ドイツとオランダで長年研鑽を積んだ著者には、文献を駆使して本格的な研究を行うのに十分な準備があった。

本書は四部からなる。第一部「ドルトレヒト全国総会議とその歴史的背景」は、アルミニウス主義の前兆の叙述に始まり、レモンストラントと反レモンストラントとの論争を辿り、次いで会議の経過、審議事項と信仰規準を中心とする諸文書の成立を詳しく論じる。アルミニウス主義が提起した問題に答えるために、この会議が聖書翻訳、信仰教育、ベルギー信仰告白やハイドルベルク信仰問答の改訂問題といった広範な事項を扱うことになった事情が、これによってよくわかる。また著者は、この会議と政治的権力との関係についても鋭く指摘することを怠れない。第二部は、ドルトレヒト信仰規準に先行する三つの関

係文書（本邦初訳を含む）の翻訳である。第三部は、ドルトレヒト信仰規準のラテン語本文の邦訳であり、オランダ語本文との主な相違も注で示している。第四部は、「ドルトレヒト信仰規準の神学的意義——福音の慰めをめぐる戦い」と題され、この規準の前提となるレモンストラント五条項の神学的内容とそれに対応するこの規準の神学的内容を検討する。著者はこの規準の根本モチーフを「福音の慰め」に見定めて、全体の構造と神の不変性の問題、選び、制限的贖罪、聖徒と堅忍といった個々の問題を解釈する。その際著者は、カール・バルトの『教会教義学』Ⅱ／2におけるドルトレヒト信仰規準の解釈と批判を取り上げて論じている。このように第四部は、教会史的・教義史的解釈を踏まえて、教義学的な議論を展開し、著者の本領が最もよく発揮された部分である。さらに附録として、ドルトレヒト全国総会議参加者名簿を簡単な経歴を付して載せる。この規準を「福音の慰め」という根本モチーフで読み解く

ことは、意外の感を与えるかもしれない。しかし「慰め」は、信仰規準の序文の最初と第五教理条項の十五条に見え、また全体の結語には「悩める魂の慰めのために」という言葉があるから、著者が無理に持ち込んだものではなく、規準の本文そのものに刻み込まれたまさにモチーフにはかならない。したがって、「教会」と信仰者の現実を踏まえた教会的・牧会的な言葉がある（一七九頁）という著者の結論には、努めて客観的に歴史的に論じたあとであるだけに、一層の説得力がある。

（みずがき・わたる 京都大学名誉教授）  
（A5判・二四〇頁・定価三、五七〇円（税込）・一麦出版社）



## ドルトレヒト 信仰規準研究

歴史的背景と信仰規準とその神学的意味

牧田吉和  
Yoshikazu Makita



宗教改革者カルヴァンをはじめとする改革派の信仰と神学と実践を継承し、発展させたものとして、重要な文書。

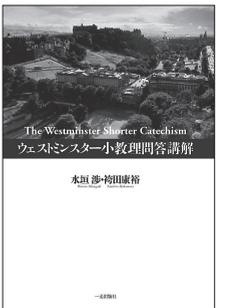
A5判・上製  
定価 3,570 [本体3,400+税] 円  
ISBN978-4-86325-040-6



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

教会の信仰を身につけるために  
水垣 渉、袴田康裕著

## ウェストミンスター小教理問答講解



南 純

本書を読んで最初に思い出したのは、戦後まもなく手にした『基督教初歩教理問答』（活水社、一九四九年）である。「誰があなたを作りましたか。神様です」で始まるこの教理問答によって受洗準備をなしたが、長じてこれが「ウェストミンスター小教理問答への手引きとして」出版されたものであることを知り、「小教理」をも手にするに至った。「人のおもな目的は何であるか。人の主な目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである」というこの『小教理』の第一問を覚えている方は少なくないであろう。

このたび、この『小教理』の講解書が出版されたことは大変喜ばしい。本書の帯には「小教理の言葉の意味と、問答の内容のかみくだいた説明は、たんなる解説に留まらず、豊かなメッセージに満ちている」とあるが、本当にそれとおりでである。また、本書は「聖書→使徒信条→小教理」という告白の歴史的過程が土台になっています」と言い、「私たちは小教理を学ぶことによって、代々の無数のキリスト者とともに主イエス・キリストを告白する伝統の中にあることを経験します。この伝統は

（聖書のもとに）あることよってのみ、生命をもっています」と説明されている。これらの言葉の中に著者らが意識的にめざしている目標が示されている。

確かに、本書の目的は研究書ではなくて、小教理を教えたり学んだりする者への手引きである。本書では、全一〇七の問答がまず数問ずつまとめられて、英文とともにその本文（翻訳文）が示され、その「講解」が、「字句の説明」と「教理の主要点」の二つにわけて要領よくまとめられている。それは本書が元々日本キリスト改革派教会の月刊誌『リジョイス』に連載されたものだけに、必要最低限に抑えられている感もある。しかし、十戒などの講解では死刑制度、生命倫理、合法的戦争、飢餓や貧困など今日の諸問題との連関にもきちんと目配りがなされている。とくに第四戒の「安息日厳守」の規定については特別に「歴史的背景」が付加され、十七世紀当時の「スポーツの書」を奨励した王権に対するピューリタンの抵抗精神が指摘されていて興味深い。

本書では、各問答間の連関も指摘され、「引証聖句」はも

とより、ウェストミンスターの『信仰告白』や『大教理問答』、さらには『ハイデルベルク信仰問答』との関連づけもなされ、広い展望とともに、これらとの積極的な取り組みが促されている。また、小教理の他の諸翻訳との比較検討も頻繁になされているが、この点では本書が日本基督教改革派教会信仰基準翻訳委員会発行版（一九五八年）を採用しながら、その後の翻訳やテキストの選定などを十分参考にし、それぞれの翻訳の良さや問題点にもふれることができるように配慮されている。しかし、そのため「引証聖句」のない本文になっていることは、聖書との関連を探ろうとする者には不便となる。諸翻訳の中でも、松谷好明訳『ウェストミンスター信仰規準』（一麦出版社）からの引用が数多くなされ、そのテキストの選択とともに注目すべきであろう。なお、この翻訳は『改革派教会信仰告白集』第IV巻（一麦出版社、二〇一二年）ではさらに手直しが加えられて納められている。

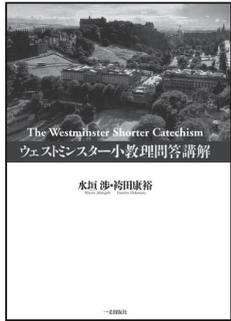
本書には、袴田康裕氏による二二頁に及ぶ解説が付けられている。そこでは、「信仰告白・大教理問答との関係、小教理問答書の特徴、聖書と小教理問答書、小教理問答書の日本語訳」などの項目が設けられ、「最後に」として「記憶・暗記ということ」で結ばれ、「教理問答を暗記して学ぶことの重要性」が指摘されている。まず、この丁寧な解説を一読してから本書に取り組んだ方がよいであろう。最後に両著者の労苦を多とし、本書がより多くの人々に活用されるために、普及版の発行を期待しておきたい。

（みなみ・じゅん 日本キリスト教会房総津教会牧師）  
（A5判・二〇〇頁・定価）三五二〇円（税込）・一麦出版社



## ウェストミンスター小教理問答講解

水垣 渉 + 袴田 康裕  
Wataru Mizugaki Yashuhiro Hakamata



小教理の言葉の意味と、問答内容のかみくだいた説明は、たんなる解説に留まらず、豊かなメッセージに満ちている。小教理を魂の対話相手として、教会の信仰を身につけたい。

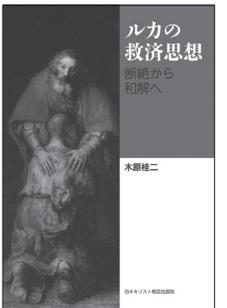
A5判・上製  
定価 2,520 [本体2,400+税] 円  
ISBN978-4-86325-042-0



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

ルカは「神の救いと人間の改心」をどう描いたのか  
木原桂二著

ルカの救済思想  
断絶から和解へ



大宮有博

落語の世界で「真打」は「スタートライン」か、それとも「最終目標」かという議論が昔あった。そして私が大学の学生だった頃、日本の人文系の大学では博士号は「最終目標」という印象が強かった。ところが最近、大学の世界も色々あって、博士号を研究者の「スタートライン」とする考えが定着し、日本の大学院で神学博士の学位を取得する方が増えている。

この変化は、一つのテーマをしっかり掘り下げた神学書の出版がこれから増えるということを意味している。というのも博士号の条件は、「博士論文を原則一年以内に出版すること」なのだから。こういった神学書が出版されるためには、一定の資金援助が必要である。木原氏の博士論文の出版を助成した日本基督教団信濃町教会の慧眼に敬服する。

本書の著者・木原桂二氏は、西南学院大学を卒業された後、バプテスト連盟の教会で牧師として働きながら、関西学院大学で研鑽を積まれた。

本書の課題は、ルカが神の救いと人間の改心（メタノイア）

子の譬え話」などをおして、神と断絶していたが改心して神に立ち帰る者と、自分の正しさに固執して神に立ち帰ること（改心）を拒否する者の二者が描かれていることを示す。ルカにとって神の救済行為とは、失われた存在を捜し求めて自らのもとに引き寄せる行為である。そして、その神の救済行為を通して、隣人とどう向き合うべきかをも問われている。

本書全体で展開された用語の分析とテキストの釈義は、二五五頁に結論として要約されている。すなわち、改心は「私・私たちは何をなすべきでしょうか」という人間の意志とイエスの救済の意志によるものであり、改心をした者は「改心にふさわしい実」として神と人との間そして人と人との間で和解（関係性の回復）をしなければならぬとある。そして、その改心はすべての人に要求されている。

本書は全体をとおして、精緻なテキスト釈義の上に組み立てられた安定した論旨展開である。ちなみに本書の結論は、本誌

をどのように描き出そうとしたかを、編集史的手法によって明らかにすることにある。

本書は二部構成である。第一部では、「罪」と「改心」という言葉がルカ文書（ルカ福音書と使徒言行録のこと）のなかでどのような意味をもって用いられているかを検討する。「罪」という言葉は、ルカ福音書では「神的存在に対する『実存的な理解』」として示されるが、言行録ではイエスや使徒に対する拒絶こそが「罪」なのである。また、「立ち帰り」はルカにとって、人間と神との「関係回復」であって、キリスト教信仰に改宗することを意味する。

第二部では、改心がテーマとなるテキストの釈義が展開される。ここではまず、例えば「実のならないいちじくの木の譬え話」（ルカ二三・一―九）などの釈義をとおして、ルカ文書にとって「今」は神の裁きが保留されている時であって、これは人間が改心するために与えられた神の恩恵の時であることを述べている。次に、本書の装丁にも用いられている「失われた息

次号にて紹介予定のジョエル・グリーン『ルカ福音書の神学』（山田耕太訳、新教出版社）の結論に近い。せつかくの研究書なので、もう少し文字を小さくしてでも、詳しい文献表をつけると親切である。

「でも、このような分厚い本を買っても、読む時間がないなあ」という方には、「つまみ食い」ならぬ「つまみ読み」もおすすめ。第一部でもルカ文書に基づいて解説されている言葉は、キリスト者が日常的に用いながらも、うまく説明できない言葉である。気になる言葉の解説だけ読んでおくという手もある。また、第二部は註解書として、必要な箇所だけ拾い読みをする。もちろん読み通すべき本ではあるが、それではハードルがやや高いという方も、こういう風にこの本を役立てて欲しい。

（おおみや・ともひろ 名古屋学院大学教員）  
（A5判・三〇六頁・定価四四二〇円（税込）・日本キリスト教団出版局）

2013年大河ドラマ  
『八重の桜』主人公の生涯

**新島八重ものがたり** 山下智子 著

激動の時代を毅然と生きぬいた新島八重。新島襄の妻として、またキリスト者として生きた彼女の生涯と信仰を、史的裏付けを得ながら明らかにする。

四六判・144頁・1575円

母への思いが溢れる1冊

**母を語る** エッセイ集

日野原重明 / 小塩 節 他

16名が「母への思い」を綴るエッセイ集。常に祈る母など、様々な「母」が描かれる。母を通して働く神の恵みを伝える。

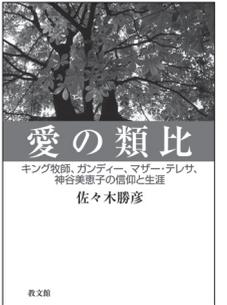
四六判・242頁・2100円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eiyou@bp.uccj.or.jp (価格税込)  
<http://www.bp.uccj.or.jp>

「愛」を実践した四人の信仰者たち  
佐々木勝彦著

愛の類比

キング牧師、カンディイ、マザー・テレサ、  
神谷美恵子の信仰と生涯



伊藤 悟

マーティン・ルーサー・キング、マハトマ・ガンディー、マザー・テレサ、神谷美恵子——組合せとしては異色にも感じられるが、いずれも隣人のために生涯を献げた歴史に名を連ねる人々である。四人については、数多くの文献が世に出、すでに様々な角度から研究も進められてきた。にもかかわらず、彼らの生き方は震災後の時代にも感動を与え続け、その愛と真実のメッセージはこれからも廃れることがないだろう。

本書の書名を見ていささか堅く感じられる読者もあろうが、「愛の類比」は、スコラ学的「存在の類比」やバルトの「信仰の類比」の用法からヒントを得て著者が設定したという（はじめに）。「類比」（アナロギア）とは、未知の領域や説明不能なことがらを既知の類似した状況を用いて理解しようとする活動であり、「愛の類比」とはまさに愛が見えるかたちで証しされていることを指す。

取り上げられている四人は、目の前の現実的問題に正面から対峙するとともに、いずれも超越的次元に向かって開かれていた点で共通している。著者の関心はもっぱら、これら四人の人

物のなかで、超越的次元と現実課題との接点がいかにもたらされ、それがいかにして持続されたかにある。

本書の特徴は、一つは「痒いところに手が届く」とでも言ったらよいだろうか。いずれの人物も一般的にもよく知られ、どのような功績を残し、何がその人生の特徴であったのかは多くがそらで言えるほどである。しかし一旦、その背景や論拠を明確にせよと言われると、断片的な理解だけでおぼつかない部分も多い。本書では、これまで理解していそう、していなかった事柄、何となくあやふやなままにしてきた事柄、表層理解に留まってきた事柄を見事に整理し、そこから掘り直しの作業をしてくれている。痒いところに手が届くのである。

例えばM・L・キングについては、「1 略年譜」からはじまり（略年譜というわりに一四頁も割いてかなり詳細に記されている）、「2 アメリカの黒人の歴史」「3 M・L・キングの家族」「4 M・L・キングの学んだ思想」「5 非暴力への遍歴」「6 非暴力運動の発端と展開」という構成で進められるが、なかでもキングの生き方に大きな影響を与えた思想として、ヘブ

ライズム、山上の説教の解釈、H・D・ソロー、W・ラウシェンブッシュ、R・ニーバーの思想が次々に紹介されていく。キングの見える功績は略年表だけに留められ、むしろキングに影響を与えた人物や思想の紹介、そしてキング自身の言葉に始まる紙面が費やされているのである。マザー・テレサについては、彼女に大きな影響を与えたアッシジのフランチェスコとリジュイーのテレーズの思想的背景まで追求する。ガンディーについては、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、キリスト教との関わりを次々に明らかにしていく。神谷美恵子については、新渡戸稲造、クエーカー、ハンセン病関連の歴史を丁寧に取り上げている。いずれの人物についても、読者の関心を次々と奥の間へと引きずり込んでいき、まさに「類比」のど壺にはまり込んでいくかのようである。

もう一つの本書の特徴は、一次資料、二次資料からの引用が贅沢になされている点である。キングは、『マーティン・ルー

サー・キング自伝』からの引用が最も多い。ガンディーは『自叙伝』、マザー・テレサは『マザー・テレサ書簡集』『秘められた炎』、神谷美恵子は『著作集』や『コレクション』からの引用が相当量みられる。聖書からも、まとまった引用が多くなされ、本書自体が貴重な資料集となっている。

四人は二十世紀を代表する愛の証し人であることに疑いを挟む余地はないが、なぜこの四人であったかについては、ほとんど説明がない。三人のキリスト者の中でガンディーは少々異色であるし、唯一の日本人として神谷美恵子を取り上げられているのも若干の違和感を覚える。著者の解説がもう少し欲しい。とはいえ、これら四人の「人物史」を学ぶにあたって、入門書というよりは、ややアドバンスド・レベルの書物として、これまでないアプローチと水準で読者の信仰と生き方を刺激してくれる良著と言えよう。（いとう・さとる 青山学院大学教授）

（四六判・三三〇頁・定価一九九五円（税込）・教文館）

神学ダイジェスト113号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2012年12月発行  
A5判128頁  
定価610円・送料80円

特集 二十世紀の神学者（前）  
第二バチカン公会議を支えた神学者たち  
教会の三位一体的基盤  
神の母性と聖霊の女性性について  
すべての信者の教導権  
信仰、希望、愛  
霊性の規範としての福音  
「わたしの記念として」  
ヨブの四つの顔  
カトリック学校教育の宗教的次元（四）

M Ⅱ D・シユニユ  
Y・コンガール  
E・スキレベークス  
K・ラーナー  
H・U・フォン・バルタザール  
X・レオン・デュフル  
J・ダニエル  
H・ド・リュバック  
カトリック教育省

上智大学神学会  
神学ダイジェスト編集委員会  
東京都練馬区上石神井4-32-11  
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349  
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

近代におけるカトリック教会の多面性  
高柳俊一編

シリーズ・世界の説教  
近代カトリックの説教



石井祥裕

「シリーズ・世界の説教」第三巻をなす本書は、十六世紀から現代までの二十九人の説教作品を収録している。近代思想の華々しい自己主張のかけで近代カトリックの思想自体あまり知られていないなか、本書は各時代において重要な足跡を残した人々に光を当てている。本書によって初めて名前を知る人物も多いだろう。そのような場合のために、各作品冒頭にある簡潔な人物略伝はまず貴重な情報源である。

それぞれの人について、本シリーズのテーマである「説教」という側面から、つまり神学的著作や論考ではなく、聴衆に向かって語られた、生きた「ことば」が示されている点でユニークな翻訳編纂作品となっている。収録された全二十九人の説教作品は大きく分けて次のような時代背景から選ばれている。

(一) 十六世紀のトリエント会議時代の五人（特にカルロ・ボロメオ、ロベルト・ベラルミーノは有名。人文主義による教養全般の刷新および宗教改革の衝撃への対応を契機としたトリエント公会議により、司祭の不可欠の務めとして「説教」が復興されていく時代を代表する。

(二) 十七世紀から十八世紀前半までの宮廷説教隆盛時代の六人——特にボシュエが有名なフランス・ブルボン朝下の宮廷説教のほか、教皇宮殿説教という場があったことも知られる。ガリカニスム（フランス国家教会主義）という教会と国家の緊張関係も注目される一方、ともかくもカトリシズムが一国の公衆の中心にあった時代の内的風景をかいまみさせる。

(三) 十九世紀——フランス革命に象徴される近代思潮の奔流を前に、カトリック復興が目指された時代の五人。特に英米圏の説教者に比重が置かれる（ニューマン、ギボンズら）。

(四) 二十世紀——第二バチカン公会議を経て現代に至る十三人。特に、同公会議を開催したヨハネス二三世を筆頭に十九世紀末に生まれ、二度の世界大戦をくぐり抜け、公会議によるカトリック教会の刷新、神学の刷新に寄与したカール・ラーナー、バルタザール、スキレベークスらの神学者、カマラ大司教、ロメロ大司教から中南米の教会指導者、そして教皇ヨハネス・パウルス二世、ラッツィンガー（教皇ベネディクトゥス一六世）ら公会議後のカトリック教会の指導者の作品が収められている。

「説教」作品をテーマにするものであるが、同時に、近代・現代カトリック思想史への窓口となるよう選定された意図もよく感じられる。『キリスト教史』第五巻〜十一巻（平凡社ライブラリー）などと重ね合わせて読んでは、近代カトリックの置かれた状況とその中を生きた精神の多面的な煌きに触れる思いがするだろう。

カトリック教会における説教のあり方に関しては、ちょうど半世紀前に開幕した第二バチカン公会議（一九六二〜六五年）が新たな時代を切り拓いた（編者序文参照）。同公会議は説教を神の民全体の救済史的使命によって基礎づけ、ミサにおける神のことばの食卓での奉仕としての姿がその根本的な姿であることを明らかにした。このような認識の確立のために、オーストリアのピウス・パルシュ（一八八四〜一九五四年）やヨゼフ・アンドレアス・ユングマン（一八八九〜一九七五年）らによる典礼的説教の復興も現代カトリック史の重要な局面をなし

ている。以来、ミサの聖書朗読と結びついた説教が説教の基本型とみなされるようになってきているが、同時に福音宣教の展開のために、種々の講演、黙想講話、信仰教育的な教話などさまざまな形式を通じて、神のことばに基づく、生きたことばの奉仕が神の民全員に呼びかけられている。そのような広い意味での「説教」活動を総体として把握し、方向づける実践神学の深化も求められるところである。そのような課題に向けても刺激するところの多い書となっている。感謝する次第である。

（A5判・四六三頁・定価四五一五円〔税込〕・教文館）  
（いしい・よしひろ 上智大学神学部非常勤講師、『新カトリック大事典』編纂委員）



新刊



宗教学論叢17

夢と幻視の宗教史 [上巻]

河東 仁 編

●A5判上製 本体5,000円+税

高井啓介 夢の語りとことばの遊戯—ヘブライ語聖書の「夢」解釈の技法／吉田京子 12イマーム・シーア派の夢議論／鈴木桂子 夢の拒絶と夢への憧れ—ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視／高橋原ユング心理学的観点からの夢の解釈／大澤千恵子 児童文学と夢—子どもの夢によって開かれる“生きたファンタジー”／他10篇を収録。

ISBN978-4-86376-027-1

LITHON [リト]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402  
FAX 03-3238-7638

困難を越え福音を信じて生きる喜びと希望  
井ノ川 勝著

### 信仰生活の手引き 教会



### 及川 信

「信仰生活の手引き」シリーズ第三巻として、井ノ川勝牧師による『教会』が出版された。筆者にとっては待望の書である。後書きにはこうある。

「本書は伊勢神宮のある町に立つ山田教会での伝道者としての二十八年の歩みを通して、祈り、考え、語ってきたことをまとめたものです。ささやかな書物ですが、伊勢での二十八年間の伝道者としての歩みを、すべて注ぎ出しました。山田教会で与えられた主にある交わり、既に主の御許に召された方々も多くいますが、豊かな教会の交わりを与えられました。従って、本書は山田教会の長老、信徒たちとの共同執筆と言っています。いいでしょう。しかしまた、伊勢伝道、日本伝道の苦汁も味わってきました。……改めて伊勢神宮の存在の大きさに圧倒され、伝道者としての自らの非力さを痛感する日々です」。

本書を貫くものは、福音を信じて生きる喜びと希望であり、また福音をこの国の人々に伝えることの困難と苦渋である。本書の目次は以下の通り。I 教会があなたを呼んでいる II 十字架の御旗のもとに集いて III 天に锚を降ろす IV キリストの体に連なって V 執り成しの共同体として VI 神の国を映し

出す交わり。

この目次が示す通り、各単元に記されていることは一般的な「教会論」ではなく、非常に幅広く奥深い、福音が凝縮された「説教」と言ってもよいものである。研鑽し続ける著者が感銘を受けた多くの書物からの適切な引用があり、聖書の御言葉との深い対話がそこにはある。伝道と牧会における具体的なエピソードがいくつも紹介されており、そのすべてを貫いて「教会の門を入っていただきたい」(二三頁)という井ノ川牧師の切なる祈りがある。その祈りは「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と弟子たちに語りかけた復活の主イエスの祈りであることが、本書の最後まで読み通すことによってはっきりと示されることになる。

VI「神の国を映し出す交わり」においては、東日本大震災によって甚大な被害を受けた諸教会再建の課題が、伊勢伝道の課題と重ね合わせるようにして語られている。その苦しい課題に取り組む中で著者が心の支えとして挙げるのが、ゼカリヤ書の「初めのささやかな日をさげすむな」(四・一〇)である。うず高く積まれた瓦礫の山を一つひとつ取り除き、一つひとつ積み

上げて新たな神殿を築くしかない民に対して、ゼカリヤはそのささやかな、徒勞に思える日々をさげすむなどと言って励ましたのである。

耶穌を一人たりとも入れてはならないとの血書誓約が交わされた伊勢の町に、初めて福音を運んだのは女性信徒の渡部フミだった。その後の歩みを井ノ川牧師はこう記している。

「やがて伊勢神宮外宮の前に土地を得、教会堂を建て、屋根に十字架を立てようとしたが、町の人々はそれを許しませんでした。福井捨助伝道者と信徒たちは軒瓦に十字架を彫り、ここに主の教会があることを証しました。『初めのささやかな日』でした。伊勢神宮の町で主イエス・キリストの福音を伝え、主の教会を形成するために、歴代の伝道者と信徒たちは、自ら小さな瓦礫の石に徹し、『初めのささやかな日』に身を献げました。そのような献身の積み重ねにより、今日の山田教会が形成されました」(二四〇～二四一頁)。

井ノ川牧師は最後にこう呼びかけている。

「神の国を目指す神の民・教会の地上の旅は尚続きます。苦難に満ちた旅路ですが、私たちはこの御言葉に導かれて、希望をもって旅を続けます。さあ、あなたも一緒に旅立ちましょう」

伝道が困難なのは伊勢だけに限らないだろう。多くの教会が、苦戦し敗走していると言わざるを得ないし、牧師も信徒も半ば諦めてしまっている。しかし、山田教会の牧師、長老、信徒の「共同執筆」による本書を読むと、新たな勇氣と希望を与えられる。教会を支えるのは人間の力ではなく「今おられ、かつておられ、やがて来られる」主イエスの臨在であることを強く感じさせられるからである。一人でも多くの方が本書を手にとりて読み、心新たに伝道の戦いに立ち上がることを願う。

(おいかわ・しん 日本基督教団中渋谷教会牧師)  
(四六判・二五二頁・定価一三三六五円(税込)・日本キリスト教団出版局)

**キリスト新聞社の本**  
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.

**関西学院大学 神学部ブックレット 5**

**自死と教会** シリーズ 第46回 神学セミナー  
いのちの危機にどう応えるのか

好評発売中  
真壁伍郎、土井健司、榎本てる子、中道基夫、井出浩著  
自死の問題にどう向き合い、現代の教会がどのようにして応えていけるのかを考察。二〇二二年一月に行われた関西学院大学神学部神学セミナーの講演と礼拝を収録。  
A5判 150頁 1,975円

**キリスト教カウンセリング講座**  
ブックレット 12

**ミドルエイジの問題** シリーズ 最新作  
中年期の危機を克服し、カウンセラーとして援助するために  
ミドルエイジの問題  
石井千賀子、加藤麻由美著  
好評発売中  
ミドルエイジ(中年期)に起こりやすい問題を取り上げ、その克服と援助の仕方について、家族療法の視点から、シネグラムとケーススタディーを元に解説。  
A5判 168頁 1,975円

**キリスト新聞社**  
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51  
和光フタバ2階  
TEL. 048-424-2067 (価格に税込)  
E-Mail. support@kirishin.com  
URL. http://www.kirishin.com

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zeninikan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-136 敷島センター17号F	022-223-2736	共用		fcqwks524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	仙台市青葉区2-7-2 新中央ビル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	seikokai-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishido/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisukyoushutenhanna@bb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用	http://www.biglobe.ne.jp/yokohara.cbs/index.html		00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市中区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacs	ochibook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区长尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9933			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用		tokushoten@shrit.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
九州キリスト教ブックセンター	802-0074	北九州小倉北区白銀1-6-7	093-921-8844	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川12-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emaocbs@yahoo.co.jp	

業」と、銀座教会創立記念礼拝に語られた「現実教会の福音的認識」。

四六判 函入り・64頁・3,570円

◆ニューセンチュリー聖書注解《第9回配本》

◆イザヤ書40―66章

R・N・ワイブレイ著／高柳富夫訳

バビロン捕囚の民に解放を預言した第二イザヤ。帰還後の失意の民を鼓舞した第三イザヤ。新約との関わりが深い第二・第三イザヤのテキストを、イエスの贖罪死の預言とされる「苦難の僕」を第二イザヤ自身の苦難とするなど、成立当時の時代背景に立ち返り読み解いていく。

A5判・378頁・6,510円

◆グループスタディ12章《第7回配本》

◆イエスのたとえ話

芦名弘道著

マタイ、マルコ、ルカ福音書に記された、イエスが語った12のたとえ話。聖書と生活が乖離する現代、日常に即したたとえ話は、すでに与えられている恵みに気づかせる、より深い愛の世界への入り口であり、本書は、何度も聞いた話に新しい光を射し込ませる、よき導き手となる。

四六判・120頁・1,260円

◆TOMOセレクト

◆私は私らしく生きる 水野隆三詩集

森本二太郎写真／中村啓子朗読《写真・朗読CD付》

9歳で脳性麻痺となり、四肢の自由ばかりでなく言葉さえ奪われた源三さん。しかし、まばたきを通して残された数々の信仰詩は今でも多くの人の心の支えとなっている。その作品の中から47点を精選して森本二太郎氏の写真を添え、中村啓子さんの朗読CDを添付。

B5判・64頁・2,940円

INFORMATION  
近刊情報

■新教出版社

渡辺禎雄聖書版画集（仮題）

2013年は渡辺禎雄生誕100年。それを記念して画伯の代表的な作品70点余りを収めた版画集を刊行する。日本の伝統的な型染技法を用いて聖書物語を表現した独自の世界は、観る者を静謐な祈りへと誘い、近年国際的な評価がますます高まっている。贈り物にも最適な1冊。

A4判・180頁・予価4,900円

■教文館

「主われを愛す」ものがたり——賛美歌に隠された宝

大塚野百合著

世界で最も愛されている賛美歌「主われを愛す」。表題曲ほか、身近な賛美歌の誕生秘話や、作詞・作曲者の知られざる生涯と信仰を丁寧に辿った、賛美歌ものがたりの決定版！

四六判・232頁・1,995円

明治キリスト教における女性と国家

木下尚江とキリスト教界指導者との対決

鄭玳汀著

社会運動家、ジャーナリスト、作家として活躍し、廢娼運動、禁酒運動、足尾銅山鉱毒問題などで論陣を張った木下尚江。彼の思想的展開を、同時代の著名なキリスト者と比較しながら探る意欲的な試み。

A5判・416頁・4,410円

■日本キリスト教団出版局

CDで聴く日本の説教《CD2枚付き・最終回配本》

渡辺善太

加藤常昭 監修

「聖書正典論」を主張した渡辺善太が、銀座教会時代に行った説教三編を収録。「善太節」と呼ばれる語り口がテンポよく展開しており、八十歳にしてなお関連な名説教である。「人間に対する最高の評価」と「信と知と

新教出版社

# 福音と世界

2013年1月号

特集 生命倫理——生命はだれのものか

生命倫理にまつわる諸問題Ⅰ——終末期医療

生命科学のグローバルな競争と国際規制

刑法と生命倫理

死生学と生命倫理

宗教はいかに生命倫理を語りうるか

語り継ぐ3・11 沖縄で

WCC釜山大会に向けて

【新連載】脱核時代のエチカⅠ

島居雅志

島菌 進

宮本弘典

渡辺和子

飯田篤司

竹花和成

西原康太

福岡 場

A5判・80頁・本体571円・〒68円  
年間予約購読料千共8,016円(消費税込)

# 王道



21世紀中国の教会と

市民社会のための神学

王艾明著

松谷暉介編訳

現代中国を代表する中堅キリスト教神学者が、国家と教会に向けた警醒の言葉。

◎四六判・274頁・定価2415円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1  
TEL: 03-3260-6148  
FAX: 03-3260-6198

## 編集室から

昨秋、プラハに行く機会を得た。プラハの春の舞台となった地、そして、カフカ、リルケ、ミュシャといった芸術家ゆかりの地。その『百塔の街』は、どんなにすばらしいところなのだろうかと、浮き立つ心持ちで降り立った。

しかしその想いは易々と打ち碎かれる。街の中心を悠然と流れるウルタヴァ（モルダウ）川も、秋の小雨を受けて静かに輝く石畳も、声なき声で憂いを語り、街全体に重々しい雰囲気がかたまり、漂っているように思えたからだ。

旧ユダヤ人街にある、ピンカスシナゴグに入ったときのことだった。何か戦慄が走るような異様な感覚に襲われて立ち止まっていると、七十代ぐらいのユダヤ人と思われる四人組が、シナゴグの壁を指さしながら「ほら、あったあった」という感じで話している。よくみると、その内壁一面には、プラハから絶滅収容所に送られた八万人近いユダヤ人の名が記してあったのだ。どこかで書物のなかの出来事だと思っていたことを

目の前に突きつけられ、めまいを覚えながらそこを後にした。

帰国後、あの街、あのシナゴグで覚えた感覚は何なのだろう……と悶々としていた私に一筋の光を与えてくれたのは、若松英輔著『死者との対話』（トランスビュー、二〇一二年）だった。その書は私たちの多くがもつであろう死者論を超えて、生ける死者を語る。そこから、死者は我らと共にあり、常に語っている……とのメッセージを私は受けとった。

そうであるならば、あのとき私は、あの街が経てきた複雑な歴史、そしてシヨアーの犠牲者たちの生きた声に実際に出会い、あまりの衝撃的なその証言に狼狽していたのかもしれない。

「証し」や「証し人」と訳されるギリシア語のマルテュスという言葉は、二世紀中頃からは転じて殉教をも意味するようになったらしい。あの地でいまなお語っている彼らに「自分たちのマルテュスを、お前はものがたっていくことができるのか」と、問いたただかれているように思えてならない。（加藤）